

平成 30 年度特別講演の感想の一部です。

- ・死について考える機会はなかなかないのでいい機会になりました。
- ・訪問看護の生の声や様子を知らなかったので、いい機会になりました。看護師として働いていた方も患者になって初めて気が付けたことが多くあるとおっしゃっていました。看護師として活かせるようにそういったことを今から少しずつ考えていきたいです。
- ・溺れて死ぬよりも渴いて死にたいと思います。
- ・死を怖いものだと思ってきましたが、ちがうのだと感じました。
- ・在宅看護に興味がわきました。
- ・映像が多くてわかりやすかった。
- ・看護師の活躍の場が病院だけではないということを知りました。
- ・将来在宅で働きたいと考えていたので、今回の公演はとても面白かったです。死に近づくにつれて枯れるという表現はまさにその通りだと実体験(祖父の死)を通じて感じました。病院で食欲がなかった祖父が、一時帰宅した際はもりもりと食事をする様子は今でも記憶に残っています。今日、在宅看護への興味がさらに深まりました。
- ・今後、実習や臨床の場で死に向き合う場面にあったときに、今日の講演を思い出したいと思います。
- ・死について真剣に考えることを少し恐れていた自分もおり、自分の思いと向き合うことが出来ました。
- ・春から病棟で働く看護師として最後までその人らしい生活を支えられるようにしたいと思います。
- ・尊厳とはなんなのか、あまり考えることがなかったけれど、その人の全体を知り向き合っていきたいと思います。
- ・尊厳とは？という質問に対して私も答えられなかったので、今回の講義で尊厳死や平穏死についてより具体的に考えることが出来ました。視野が広がりました。
- ・救急外来で亡くなる方を数名見ました。死が怖いというよりも、死が当たり前のように目の前にある看護の世界が怖かったです。それ以上に死に慣れてしまう自分が怖く感じました。一人ひとりの尊厳を大切に、自分のできる看護、看取りが出来る看護師になりたいです。
- ・内容が死についてで難しい部分でしたが、ビデオや先生の実体験が多く含まれており、とてもわかりやすく死について考える機会となりました。
- ・生と死について深く考える機会になりました。これから看護師として働くうえで、目の前の患者さんの人生や物語について考えながら接していきたいと思いました。
- ・唯一絶対にあるものであり、とても身近なものであるということがよくわかりました。尊厳を大切にできる看護師になりたいです。
- ・今まで、死について学ぶ機会が少なく、平穏死を迎えるためにはどういったケアが必要で、どのような過程を辿るのか、わからないことが多くありましたが、今回のご講演を聞き、移

動、自分で口から食べること、排泄をトイレですることの自由を守ることが尊厳に繋がるということを学び、それを守るケア、支援することで平穏死と繋げることが出来ると、学ぶことが出来ました。これから、看護師として多くの死と向き合うことがあると思うので、本日学んだことを活かしたいです。

- ・自分の祖父や祖母と重ねて考えることが出来ました。
- ・看護学生になってから、死について考える機会は増えたけど実際に死に直面した患者さんとはかかわったことがないので、あまり深くわからなかったけど今回の話を聞いて、映像を見てまだわからないこともあるけど、以前より深く知ることが出来ました。平穏死と延命死の違いも多くあることが分かって驚きました。
- ・死ぬということ、どう死ぬかということについて、考えさせられました。自分の答えはまだ出せてないけど、答えを出そうとしている人を支える看護師になりたいです。
- ・数値や身体だけでなく、その人の心理やこれまでの生活など全体を見た看護を実施できるようになりたいと思いました。そして、そうなるためには自分にとっての尊厳や死とは何かについて考えておく必要があると知りました。
- ・尊厳とは何か、最後まで移動することや食べることだとおっしゃっていました。食べ方はどうであれ、自分で食べること、自分で何かをすることを支えることが大切だと感じました。また、その人を最後まで寄り添い、その人の傍にいることも大切だと感じました。
- ・がん患者を看る看護師から、がんと闘う患者の立場になった方が「話をしなくても傍にいてほしい」と話されていて、私は患者さんは「話がないなら来なくていい」と思われることがほとんどだと勝手に思い込んでいたのだと思います。また、「傍にいてほしい」思われる看護師になりたいと思います。
- ・人の死がタブーされずに、自分の意思を、生き方を支えられるような看護や医療があることに希望を感じ頑張っている人々がいることが知れました。
- ・最後のDVDでも考えさせられるものがあり、人の生きて死んでいくという人生について考える機会となりました。今後の実習に活かしていきたいと思います。
- ・普段あまり考えることのない死について色々と考えることが出来ました。人それぞれ価値観は異なり、死についての考えや思いも違うと思います。一人ひとりの死生観を大切に出来る人になりたいと思います。
- ・先生の講演を聞いて、その人を最期まで尊重すること、その人が望む暮らしを支えることが大切であると思いました。
- ・身体的な疾患だけでなく、患者の生活全体を考えられる看護師になりたいです。
- ・「人を看る」「生活を看る」「その人らしく」「全人的に」言葉でいうのはとても簡単ですが、看取りって本当に難しいと思いました。(私も在宅で家族が亡くなったので)生き方に正解がないように、死に方に正解はなく人の数だけある一人ひとりの「死」に一人ひとりの最期までの「生」に向き合える看護師になりたいと思いました。
- ・平穏死の本は買わせていただいでいて、読ませていただいでいます。とても自分の人生経

験では考えられないことが多く、学びとしてとても多く得ることが出来ているので、これからも様々な看護を見させていただきたいと思いました。

- ・グループワークでも事例を基にその人の人生観をどのようにケアに組み込むべきか悩んでいたもので、とてもいい機会となりました。

- ・今まで実習で患者さんに関わる機会がありましたが、自分は患者さんが病気で出来ないことがあればそれはもうどこかで仕方がないと思っていた部分があったなと思いました。移動してどこにでも行けることや口から食べられること、排泄できることが人間が生きていく中でどれだけ尊いものであるのかということを知り、今日の話聞いて考えさせられました。

その人の人生、生活を大切に出来る看護師になりたいと思いました。

- ・自分はまだ若いからといって自分の死について考えることもないし、死にゆく人を見たことがないので、今日の講演を機にしっかりと考えていきたいです。

- ・身内や親せきに亡くなった人がいないので死について考えることはなかったのですが、看護学生として死を考えるいい機会になりました。

- ・死というものについてあまり深く考えたことがなくて、だけど今回の講演で私の生きている今もゆくゆくは死につながっていて、その時にどんな姿でありたいのか、また、患者さんもどのように受容するのか、という部分を深く考える機会になりました。

- ・「死」ということを深く考える機会があまりなかったのですが、今回お話を聞き、平穏死についてももっと勉強したいと感じました。枯れながら死を迎えることが人間の本来の死に方なのだと思います。

- ・看護学生になって最近ようやく病気である患者さんは受け入れられるようになってきたが、死んだ患者さんについては怖いという感情が出てきてしまうと思います。尊厳や平穏死について、自分のことをまず考えることで、患者さんにとっての尊厳や平穏死について考えられると気が付かされました。

- ・最期の時まで食べられる、話せる、移動が出来るということが今の医療現場では難しいと考えられているけれど、それが本当に人間の最期であると思いました。

- ・看護師の活躍の場が病院だけではなく、いろいろなところにあるということが分かりました。そして、看護師としては持っておかないといけない気持ちもわかったので良かったです。死というものを身近に感じたことがなかったので、今回の機会に考えてみようと思います。

- ・小さいころ、私は死を見たことがあります。そのためあの頃死を見てもその人が生き返ることがないこともわからず涙も出ませんでした。今回の講義を聞いて看護師を目指す者として死に向き合う大切さを知りました。

- ・人の死について考えておくことで看取り方も変わってくると思ったので、死や尊厳について自分の考えを持とうと思いました。

- ・私は、近年の多死社会の中で人の死に立ち会ったことがない1人です。今回の公演を聞いて、「自然死は枯れていくこと、枯れていくからこそ水がしみる」という言葉がとても心に残っています。実際に人の死と向き合ったことがないため、正直怖い部分がありますが、

自然死がどういうもので、その人の「望む最期」とは何か、考えると同時に自分の死についても考え直すことで、今後の実習や臨床の場で向き合う機会に参考にしていきたいと思えます。

・私は中学の時、母の死を目の前にしました。その時はまだ「看取り」について全く考えることが出来ませんでした。今回の講演を聞き、母の死を振り返りながら、死について考えることができました。

・人間の死、尊厳、その人らしさとは何かについて改めて考えることが出来ました。尊厳・その人らしさとは移動することが出来て自分で食べることが出来てお手洗いで排泄すること、これが最期まで保たれることだと断定して下さったのでわかりやすかったです。上記3点が支えられる看護、それが出来るよう今後も勉学に励み、自己の考えを模索していこうと思います。1つ難しいなと感じたのが、末期のがん患者さんの「ただ側にいること」です。病院だとその入院期間中に初めてがん末期だと告知される方もいらっしゃいますので、その時にその方がどういう時期であるかにもよると思います。がんを受容できない時に患者さんは看護師の訪室を拒否なさっていました。そうすると最低限度のことを行い、その中で寄り添えるようになると思うのですが、ご本人さんは拒否なさっていても、もしかしたら心の奥では誰かにいてほしいと思っていられるものなのではないでしょうか？そうであるならばやはり拒否なさっていても側にいる時間を別にとるべきなのではないでしょうか？

・私は最近祖父の死や親戚の死をみてきましたが、自分の死については考えていませんでした。先生の「看護師が死を恐れてはいけない」という言葉に改めて死に関して考えなくてはいけないと感じました。

・とても説明がわかりやすく、特に延命することは溺死にあたり、枯れることこそ良いのだというのが干し柿の例えや黒田さんの映像で理解できました。在宅看護に興味を持ちました。

・口では簡単に「患者の尊厳を守る」といえるが、その尊厳とは何かということについてはぼんやりとしか理解しておらず、しっかりと理解していなかった部分がありました。ですが、今回の講演を聞いて、患者の尊厳とは「移動できること」「口で食べること」「自ら排泄できること」ということだということがわかりました。ですが、これだけでは理解できたとはいえないと思うので、これからの学校生活や実習で理解を深めていきたいと思えます。

・死についてや最期の迎え方について考える機会となりました。最近行き過ぎた延命治療によって平穏死という選択が少なくなっているように感じますが、本来の死に方をすることの大切さを感じました。

・「死」に関わる職業にも関わらず「死」に対して考える機会がありませんでした。自分自身死んだらそういう人生だったんだと思っていたので、深く考えられる良い機会でした。特に印象に残ったのは、死に近づくのは枯れることということです。枯れるから食べられるということに印象を受けました。